

ジラルルの三者関係論から見たジャン＝ジャック・ルソー

織 田 年 和

キーワード：三者関係、模倣の欲望、依存関係、ジラルル、ルソー

はじめに

ルソーは青年期において庇護者のヴァランス夫人および夫人の使用人クロード・アネとの間に三者関係を経験し、それを自伝で美しく詳述し、さらに小説『新エロイズ』で三者関係を取り上げている最中に、また実際に三者関係に陥りそうになった¹⁾。以上の事実からすると、ルソーは明らかに三者関係にこだわり、取り憑かれているとさえ見える。しかし、ルソーにおける三者関係はルソーの個人的性癖や嗜好に還元すべき事柄ではなく、人間関係論という一般的な問題が、ルソー的に現れ出た形であると考えの方が生産的である。それゆえ、まず俎上に載せるべきであるのは、三者関係がルソーの思想にとって具体的にどのような位置にあるのかという問題である²⁾。ジラルルの三者関係論の観点からこの問題を見る³⁾と、ルソーの実生活および小説というフィクション上での経験と彼の市民社会批判の論理がある共通性をもってることがわかる。本稿の目的は、それがどのような共通性であるのかを明らかにすることである。

1. ジラルルの模倣の欲望と三者関係

ジラルルによれば、主体は対象に対して自然に欲望を発生させるのではなく、欲望は他者の欲望の模倣によって生み出される。なぜなら、主体にとっての対象の価値は対象自体に内在せず、対象への他者の欲望によって初めて出現するものだからだ。他者に欲望されない対象は価値を欠いた空虚な器でしかない。欲望の構成は主体、対象、モデル（場合によってはライバルともなる）の三項から成る図式によって理解されなければならない。主体、対象の二項だけでなく、三番目の項として対象の価値の源泉であるモデル（＝ライバル）を加えるのが、ジラルルの欲望論の特色である。他者の欲望の模倣が人間の欲望の本質であれば、人間関係が主体と対象の二者のみで完結するものではなく、三者関係となるのは必然的である。対象の価値の源泉を他者の欲望に置く模倣の欲望論から見れば、人間関係の基本型は三者関係なのだ⁴⁾。

模倣の欲望論に対して想定される反論として、次の二つがある。1) 欲望が模倣から生じる

のなら、最初の欲望はどのようにして発生するのか、2) 食欲、性欲などの生物学的欲望は対象に向かって直接的に生じる欲望で、他者の欲望の模倣から生まれるものではない。この二つの反論には、再反論が可能である。1) に対して：人間に関わる領域において、ある事象の起源を探究しようとするには、原因と結果の因果関係を直線的な連鎖としてのみ捉えるのではなく、相互的ないし円環的に捉える相互的因果論の観点を導入することが不可欠である。相互的因果論を排除し、直線的因果論のみを押し進めると、不条理に陥ることは、「風が吹けば桶屋が儲かる」や「鶏が先か卵が先か」のような民衆の俚言が如実に示している。前者は、部分的には正しい因果の二項を無数に連関させることから生じる不条理を、後者は、原因とも結果ともなりうる要素をそのいずれかに限定することの不条理を言い当てている⁵⁾。最初の欲望は、主体とモデルが相互に転換しうるような、時間的先行性が必ずしも論理的先行性を意味しない状況から生まれるのであって、誰に本質的に帰属するのかを判断するのが困難であるとするのが適切な欲望である。2) に対して：人間における動物的部分に対応する生物学的欲望はむろん存在するが、人間は生物学的欲望を必ず文化的・社会的な規範に則って満足させるのであるから、模倣の影響、すなわち文化的影響を被らない生物学的欲望はありえない。文化は、長期的な人間相互の模倣の集積である。人間にとっては、性も食も文化の問題であることは、宗教的（ないし社会的）禁止の多くはこの二領域に関わるものであることによって表されている⁶⁾。

人間関係の基本が三者関係であるとすれば、三人目の人物が見当たらず、二者だけの関係のような外観を呈する場合でも、三者関係として把握する必要がある。そのためには、三者関係の各項を構成する主体・対象・モデル（＝ライバル）のうちの、欲望の対象として具体的・物質的なものに限定せず、名誉や人気などの抽象的・非物質的なものも含むとしなければならない。そして、まさしく、ルソーが「人間への依存」（『エミール』、p.147、上、p.114）とよぶ依存関係⁷⁾は物質的依存だけでなく、他者への精神的な依存を包含することで、欲望対象が抽象的・非物質的な場合までカバーしているのである。

人間の欲望は、個体および種の存続に必要な生物学的欲望（食欲、性欲）だけではない。ルソー的な意味で、自然状態を離れて社会人となった人間は名誉、尊敬、人気なども欲望せずにはすませられない。そして、これらの非物質的欲望対象はただ他者だけがわれわれに与えることのできるものだから、これらを欲望することで、人は他者に精神的に依存する。自己の優越性はただ他者に承認されることによってのみ、成立するからである⁸⁾。

大衆の人気を獲得しようと競争する政治家や芸能人にとっては、大衆の人気が欲望対象であり、他の同業者がライバルであるから、これが主体・対象・ライバルの三者関係であることは容易に分かる。しかし、二者だけの関係であっても、互いに相手による評価を欲望対象とするとき、構造的には三者関係であることは変わらないのである。

甲が乙の尊敬ないし好意、愛などを欲しており、乙が容易に甲の欲しているものを渡そうとしないとき、乙は甲の欲望を阻害しているわけだから、甲にとってライバルである。乙は甲の

欲望の対象（尊敬、好意、愛など）の保持者であるとともに、甲のライバルであり、ときには対象とライバルが一体化したのとも見える。このような状況と、甲と乙がライバルとなって三番目の人物である丙の愛（または好意ないし単なる賛意）を争っている場合を比較すれば、三者関係の主体・対象・モデル（＝ライバル）の構造は、いずれの場合においても同一である。欲望対象が三番目の人物として、甲乙にとって外在しているか、甲ないし乙から見て、競争相手に内在しているかだけの違いである。

二者が互いに自分の意見の正しさを相手に証明し、相手を説得しようとしているケースを想定してみよう。双方にとっての欲望対象は相手に自説の、つまり自分の正しさを認識させることである。両者の主張の正しさは同時に並立しないから、欲する対象を獲得できるのは、二者のうちのいずれか一人である（丙の愛を獲得できるのが、甲か乙のいずれか一人でしかないのと、同様に）。自説の正しさという欲望対象を入手できるのはただ相手（他者）からだけだから、両者はともに、相手に依存している。対象の価値を生み出すのは、他者のみである。価値がただ他者のみによって供給されるという事実は、名誉、尊敬、人気のような抽象的・非物質的な対象を欲する場合、特に顕著である。ローマ皇帝ネロは人々に皇帝として崇拝されるのではなく、芸術家として称賛されることを望んだが、皇帝の権力をもってしても、それは簡単ではなかった。服従ではなく、称賛されることを欲するのであれば、いかなる権力者でも、他者に依存せざるをえない。

2. ルソーの依存関係

ルソーによれば、自然状態を離脱し、社会状態に入った人間の相互関係の際立った特色は、「人間への依存」とよぶべきものである。

「依存状態には二つの種類がある。一つは事物への依存で、これは自然にもとづいている。もう一つは人間への依存で、これは社会にもとづいている。事物への依存はなんら道徳性をもたないのであって、自由をさまたげることなく、悪徳を生み出すことはない。人間への依存は、無秩序なものとして、あらゆる悪徳を生み出し、これによって支配者と奴隷は互いに相手を墮落させる。」（『エミール』、p.147、上、p.114-115）

「以前は自由であり独立していた人間が、いまや、無数の新しい欲望のために、いわば、自然全体に、とりわけその同胞に屈従するようになり、彼はその同胞の主人となりながらも、ある意味ではその奴隷となっているのである。すなわち、富んでいれば同胞の奉仕を必要とし、貧しければその援助を必要とする。と同時に、中位の者でも同胞がいなくてはとうていやっていけない。」（『人間不平等起源論』、p.174-175、p.101）

「事物への依存」は、光合成ができない動物にとっては植物ないし他の動物に依存して生きるほかないことに究極的な原因があるから、当然、「なんら道徳性をもたない」。道徳性は精神性という意味であり、精神的な帰結をもたらさない「依存」であれば、「悪徳を生み出すことはない」。問題であるのは、自然状態では存在しなかった「人間への依存」であり、社会状態において初めて生じた。「人間への依存」には物質的な依存と精神的な依存の二つがある。ルソーはこの二つを特に区別せず、議論をすすめているが、精神的な依存を依存関係に含めることが重要である。人間への依存においては、物質的な依存に、精神的な帰結が不可避免的に含まれざるをえない。奴隷は支配者に対して卑屈になるほかなく、支配者は奴隷を道具的存在とみなす一方、彼らの阿諛追従を常時必要として、自らも人間性を失い⁹⁾、「支配者と奴隷は互いに相手を墮落させる」のである。ルソーのこうした強者と弱者の退廃的相互依存は、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法を明らかに予告している。しかし、依存関係は、支配者と奴隷のような権力関係による不平等な相互依存ばかりではない。「中位の者でも同胞がいなくてはとうていやっていけない」。アダム・スミスやデュルケームが社会の近代化の証しとして礼賛する分業も、ルソーには悪しき相互依存でしかない¹⁰⁾。

本稿の論点からすると、ルソーが、人間の間にはほとんど差異のない状態（自然状態）から、差異のある状態（社会状態）への移行のありさまを見事に描いているところに注目したい。その移行の原動力となるのは、自然的属性を除いて互いに差異のなかった自然人たちが「無数の新しい欲望」をもつことである。「無数の新しい欲望」とは、ジラールのにいえば、模倣の欲望であろう。

自然人が生存に必須な物しか欲望しない、「真の欲望 [ses vrais besoins] だけを感じる」¹¹⁾（同上、p.160, p.80）のに対して、社会状態に入った人間は、なんら生存には必要でない「無数の新しい欲望」に身を焦がすことを覚える。生存に必要な欲望のうち最たるものは、他者の尊敬への欲望である。

「各人は他人に注目し、自分も注目されたいと思いはじめ、こうして公けの尊敬を受けることが、一つの価値をもつようになった。最も上手に歌い、または踊る者、最も美しい者、最も強い者、最も巧みな者、あるいは最も雄弁な者が、最も重んじられる者となった。そして、これが不平等への、また同時に悪徳への第一歩であった。この最初の選り好みから一方では虚栄と軽蔑とが、他方では恥辱と羨望が生まれた（...）人々が互いに評価しあうことをはじめ、尊敬という観念が彼らの精神の中に形成されるやいなや、誰もが尊敬を受ける権利を主張した。そしてそれはや誰にとっても、それを欠いては不都合が起こればすまなくなった。そこから、礼儀作法の最初の義務が、未開人の間においてすら生まれた。そしてまた、故意の不正はすべて侮辱となった。というのは、侮辱された者は、その不正から生じた損害とともに、時として、その損害そのものよりも堪えがたい、自分

自身に対する軽蔑を見てとったからである。」(同上, p.169-170, p.93-94)

最初は、他者からの尊敬、つまり高い評価は物質的な利益につながることで、価値をもった。しかしすぐに、尊敬を受けることそのものが価値となり、軽蔑は「損害そのものよりも堪えがたい」ものとなる。自然状態を抜け出した人間は、「恥辱と羨望」の方ではなく、「虚栄と軽蔑」の側に立つことに、物質的利害を超える重要性を与えないではいられない。これと同じ事実が、大都会パリの上流社会においても観察できることをルソーは知っていた。そこでは、人々は他者に注目され、称賛されること自体を生きる目的としている。すなわち、他者からの称賛に依存して生きる生活を送っている。依存関係の根幹は、他者への精神的な依存である。

「高級馬車と、門衛と、料理頭をもつということが、世間並みにしていることなのです。世間並みにするためにはごく少数の人々がしているようにしなければならないのです。道を行く歩行者はこの世界の人間ではなく、町人、下層階級の人間、別世界の人間なのでして、高級馬車はまるで乗って行くためよりもむしろ暮らしてゆくために必要なようなものです。」(『新エロイズ』, II, 17, p.311-312, 二, p.114)

他者に高く評価されるためには、各種の能力や技能、美しさなどをもたなければならない、「またはもっているふりをすることが必要となった。つまり、自分の利益のためには、実際自分とは違ったふうに見せることが必要になった。存在と外観がまったく違った二つのものとなった」(『人間不平等起源論』, p.174, p.101)。自然人が知らなかった他者の尊敬や称賛への欲望をもつことで、社会人は内面と外面の分離——自覚的に行えば偽善であり、意識しなければ自己欺瞞となる——という宿命を背負い込む。

「大都会における第一の不都合は、人々が自己のあるがままの姿とは別ものになるということ、社会が彼らに言わば彼らの存在とは異なった存在を与えているということです。(…)彼女たちは自分がただ一つ重んじている生き方を他人の見方から作り上げているのですから。集会で、ある婦人に近寄ってみると、パリの女を見るつもりでいますのに、眼に映るものは単なる流行の象徴にすぎないのです。」(『新エロイズ』, II, 21, p.334, 二, p.147)

称賛への欲望は、自尊心である。自然人は「互いに評価し比較し合うことを知らない(…)自尊心は社会のなかで生まれる相対的で、人為的な感情にすぎず、それは各個人に自己を他の誰よりも重んじるようにしむけ(…)名誉の真の源泉なのである」(『人間不平等起源論』, p.219, p.181)。ルソーは自尊心の分析について、三者関係という用語は用いていないが、その

内実が三者関係的であることは正しく理解している。社会状態の本質は、各人が相互に相手よりも高い評価を求め合うところにある。

「この最初の選り好みから一方では虚栄と軽蔑とが、他方では恥辱と羨望が生まれた」。ルソーが他者を、モデルおよびライバルとしての両面から、把握していることが分かる。選好された者は選好されなかった者に「虚栄と軽蔑」を感じ、後者は前者に「恥辱と羨望」を感じる。自分の美しさを称賛されることについて考えれば容易に理解できるように、他者の称賛を欲望することは、他者に欲望されることを欲望する、つまり他者の欲望を欲望することと同義である¹²⁾。他者は、われわれが欲してやまない「欲望」の所有者としてわれわれを魅了する(モデルの面)と同時に、われわれに容易にその「欲望」を与えようとせず(ライバルの面)、憎悪と怨恨を引き起こすのである。

このように、ジラルルの三者関係論から見ると、ルソーの依存関係が三者関係の一種であることは、依存関係の根幹が他者への精神的な依存であることから、導かれる。他者の欲望を欲望することが、他者に精神的に依存することなのである。依存関係とルソーの実生活上の三者関係は、根本的には同一の現象である。人間が社会状態に移行したときから、人間関係の基本的な形は三者関係となった。社会状態、依存関係、三者関係は同じ一つのもの別称である。青年ルソーが体験し、年老いてから回顧的に美化しているルソー、クロード・アネ、ヴァランス夫人の三人が構成する「三角関係」はけっして特殊な現象ではなく、三者関係という人間関係の基本がそういう形態を取って現れただけだと言うべきである。

3. 美化された三者関係

互いに称賛され、欲望されることを求め合い、成功すれば、自尊心の満足を、拒否されれば、恥辱と怨恨を味わうような依存関係と、『告白』で美しく描写されたルソー、ヴァランス夫人、クロード・アネの、また『新エロイズ』におけるサン＝ブルー、ジュリ、ヴォルマールの三者関係はまったく異なった外観を呈しているように見えるが、いずれも同じ三者関係であることには変わりがない。唯一の相違は、ルソーにとってのヴァランス夫人、そしてサン＝ブルーにとってのジュリが女性という具体的対象であるのに対して、依存関係における欲望対象が他者の尊敬(究極的には他者の欲望)という非物質的なものであることだ。しかし、対象が具体的か非物質的であるかの相違は、対象の価値が、対象への他者の欲望からのみ発生するという原則を揺るがすものではない。美しい女性の価値も他者の尊敬の価値も、それを欲する一人または多くの競争相手の欲望に源泉がある点では、まったく同じである。

ルソーはヴァランス夫人との性的関係に入る前に、夫人とクロード・アネとの関係に気づく。

「私よりはるかに打ちとけた関係で夫人と暮らしている者のあることを知ったのは、つらく

ないこともなかった。私は自分がそういう地位を占めることを望んだことは夢にもない。だが、別の人間がちゃんとそこにおさまっているのを見ることはつらい（....）しかし、この地位を私から奪った人間を嫌わないで、私が夫人に抱く愛情が実際にこの人間の上にまで拡大されていくように感じた（....）こうして、私たちはみんなが幸福になれ、死のみが破壊できるような結びつきのうちに生活していたのである」（『告白』、p.178、上、p.254）。

「夢にもない」と否定するのは、否定する必要があるその「夢」が脳裏にあったからだろう。「この地位を私から奪った人間を」「見ることはつらい」——ルソーはアネのようになりたいたと望み、それができないことに苦しんだのだ。「私が夫人に抱く愛情が実際にこの人間の上にまで拡大されていく」——ルソーが、自分が所有したくてもできない対象を所有しているライバル（＝モデル）のアネに魅惑されており、アネのモデル的面が及ぼす魅惑とヴァランス夫人への愛が混淆していることを示している。ヴァランス夫人がクロード・アネとの関係を保ったまま、ルソーを愛人とした後も、ルソーがアネに対して感じるこうした魅惑と抑圧された怨恨の並立という両面的感情が存続したと推測できる。よく知られているように、ルソーは『新エロイズ』で、身を持ち崩して、妻子を捨てたクララン農園の下男に、クロード・アネの名を与えた。ライバルの没落を願う、抑圧されていた怨恨の表出だろう¹³⁾。

クロード・アネの死後、ヴァランス夫人が、ルソーが旅行で留守の間に、彼より年下のヴィンツェンリートを愛人とする、ルソーは今度は、対象であるヴァランス夫人の所有については、自分の方が先行しているから、ヴィンツェンリートをモデルとして見ることができず、単なるライバルとしか考えられなかったため、この二度目の三者関係は長くは続かなかった。ルソーがアヌシーのヴァランス夫人の家から押し出されるように、パリに発つのは、このときである。

クロード・アネ、ヴァランス夫人との三者関係の体験から二十年余りの後、ルソーは三者関係を題材にして『新エロイズ』を書く。サン＝ブルーは家庭教師として入ったデタンジュ男爵家の令嬢ジュリと恋に落ち、彼女を妊娠させるが、男爵はサン＝ブルーが平民であるとの理由で、縁組を拒む。ジュリはサン＝ブルーと別れ、父の勧めでロシア貴族ヴォルマルと結婚する。十年後、ヴォルマルは妻とサン＝ブルーの過去の経緯を承知の上で、サン＝ブルーを子供たちの家庭教師として迎える。再会したサン＝ブルーとジュリは精神的な深い愛情で再び緊密な関係を結ぶが、美德の一線を踏み越えることはない。ヴォルマルは、妻とサン＝ブルーが心の奥底では昔と同様に愛し合っているのを知っており、そういう二人を「生きている眼」（IV, 12, p.109, 三, p.158）となり、観察することを好んでいる。ヴォルマルによれば、サン＝ブルーとジュリは情熱が絶頂に達したときに、無理矢理に引き離されたせいで、かえって情熱を保ち続けているのであり、二人が「もしそれ以上長く一緒にいたなら、恐らく徐々に熱が冷めていったことでしょう。ところが、激しい感動を受けた二人の想像は、別離の瞬間のお互いの姿を絶え間なく呈し合ったのです」（IV, 14, p.130, 三, p.190）。引き離され

ていることが、つまりジュリが人妻であることが、サン＝プルーのジュリへの愛と欲望を持続させている。そして、ヴォルマルにとっては、そのサン＝プルーのジュリへの欲望が彼の妻の価値の根源である。つまり、サン＝プルーとヴォルマルにとっては、ジュリを対象とし、互いにモデルであり、ライバルである彼らの三者関係は、欲望の永久運動装置であり、欲望のユートピアなのである。サン＝プルーもヴォルマルも、ルソーのように、「こうして、私たちはみんなが幸福になれ、死のみが破壊できるような結びつきのうちに生活していたのである」と言えたはずである。

おわりに

ルソーは自ら『人間不平等起源論』や『エミール』で詳述した依存関係と、彼自身がヴァランス夫人、クロード・アネとともに体験した三者関係およびサン＝プルー、ジュリ、ヴォルマルの三者関係が、いずれも欲望の模倣にもとづく同一の関係として把握できる共通点をもつことに思い至っていない。ルソーは「市民社会」における依存関係の別出については見事に成功しているが、自身の愛と欲望が他者に依存することで成立に至っている事情は見逃している。これは、ルソーに『新エロイズ』を書かせた内的動機が、『告白』のそれと同根のものであることを暗示する¹⁴⁾。ルソーは自身の愛と欲望を描写し、美化することはできても、分析はできなかった¹⁵⁾。

注

- 1) ルソーは『新エロイズ』を執筆している最中の1757年に、ドゥドト夫人と恋に落ち、彼女の愛人であり、ルソーの友人でもあるサン＝ランベールを加えた三者関係を夢見た。
- 2) これまでのルソー研究者の三者関係評を見ておこう。樋口謹一は「ひとつの「恋愛」関係とふたつの「友情」関係（…）がルソーにおける「三角関係」の理想」だとし、「この「三角関係」のネットワークのうちにこそ、パトリが成立するといえよう」（「ルソー政治思想の一“祖型”について」（樋口、1978、所収、p.99-100）と述べている（樋口はアネとヴァランス夫人間が恋愛関係、アネとルソー、ヴァランス夫人とルソーの間は友情関係だとする）。三者関係をルソーの思想の「祖型」と見る点は正しいが、結論はわれわれとは正反対になっている。樋口は『告白』の著者の彼自身の体験に対する盲目性を解釈できず、そのまま受け取っており、三者関係を理想化するルソーの視点を無批判的に共有してしまっている。ルソーの市民社会こそ、根底的に依存関係つまり三者関係が貫徹した社会にはかならない。

スタロピンスキーの「欲望する意識と渴望の対象と厳しい証人とが同時に存在するには世界が狭すぎるかのように、すべてが運んでいる」（1961、p.104、訳、p.128）という指摘は、ルソーの三者関係的世界の重要な部分を明るみに出している。「厳しい証人」は欲望の媒介者のライバル的半面である。ルソーにおいては、欲望は出現するためには、禁止されていなければならない、つまり欲望はライバルを必要とする。欲望を監視する「厳しい証人」とは、少年ルソーにとってはジュネーヴの宗教警察であり、『新エロイズ』においてジュリを欲するサン＝プルーにとっては、まずジュリの父デタンジュ男爵であり、次いで夫ヴォルマルだろう。しかし、スタロピンスキーの「欲望と対象と証人」の三項図式は、「市民社会」の依存関係にまで適用され、分析されることはない。

作田啓一（1992）においても、「三人所帯」と依存関係の分析は別々に行われており（第一章「ル

ソアの自己革命」および第三章「ルソーの直接性信仰」), 両者は関連づけられてはいない。

なお、『ジャン＝ジャック・ルソー事典』(Trousson et Eigeldinger, 1996)には、「三者関係」, 「依存関係」の項目は見当たらない。

- 3) ジラールにはルソーについて纏まった著作ないし論文はない。三者関係におけるモデルの存在を映し出しはするが、解き明かしはしない「ロマン主義的欺瞞」(Girard, 1961)の例として『新エロイズ』を、模倣の欲望の激化にともなう主体の分身化の例として『対話』を挙げているだけである(Girard, 1976, p.21-22, p.80-81)。『新エロイズ』と『告白』に描かれている三者関係に関するかぎり、ジラルールのこのようなルソー評価はいたしかたのないところだが、三者関係の本質を捉えるのに成功している依存関係の問題構成を取り上げないと、公平ではないだろう。ジラルールの三者関係とモデル＝ライバルの含意については、『命題コレクション社会学』(作田・井上, 1986, p.86-91)を見られたい。
- 4) 三者関係の重要性に注目した評言に、「三者関係こそ社会の最も要素的な形態である」(作田, 1981, p.6)という作田啓一への指摘、また柄谷行人の「愛」または人間の「関係」はもともと三角関係としてある、「他人との「関係」そのものが三角関係において可能だ」(柄谷, 2001, p.415)という発言がある。作田のそれは、表面的には二者だけの関係と見えるものあっても、三者関係として理解する必要があるとの補足説明によって補われなければならない。そうでないと、すべての人間関係は三者関係であるという意味が伝わらない。柄谷のものは、漱石の作品論としての枠組みの制約もあるが、三者関係を男女間の性愛関係のみに縮減しており、その言の射程距離を狭めている。
- 5) 冷戦下の米ソ両国の軍事拡大競争や現在のイスラエル・パレスチナ両民族間の暴力の応酬のケースを例にとると、いずれかの側も紛争の原因を、相手の最初の行為に置き、自分の側の応答の行為をその結果とするにちがいない。直線的因果論によるかぎり、原因Aが結果Bを生むという以外の解答はありえないが、現実には照らし合わせて、これが不条理であるのは明らかである。ある事柄が原因であるとともに結果でもありうるとする相互的因果論の立場に立たないと、人間的事象の起源の問題は不条理の迷路に迷い込む。
- 6) 宗教上の各種の肉食の禁止、断食、儀礼的食事、近親相姦の禁止、一夫多妻婚の可否等。
- 7) 作田啓一(1992, p.54)にならって、「人間への依存」を「依存関係」とよぶ。
- 8) それゆえ、自分で自分を褒めても全然うれしくないのである。
- 9) ルソーは分かりやすく記述している。「今では私たちはみな他人なしにすませることはできない。この点では、私たちは再び無力でみじめな人間になっている。私たちは大人になるためにつくられていた。法律と社会は私たちを再び子どもの状態に投げ込んでしまったのだ。金持ちも貴族も王侯もみんな子どもだ。彼らは、そのみじめな状態をなくさめてやろうと人々が一生懸命になっているのを見て、それを種に子どもじみた虚栄心を抱き、人々がいろいろと世話をやいてくれるので、すっかり得意になっているのだが、彼らが本当の大人なら、人々はそんな世話をやきはしないのだ」(『エミール』, p.147, 上, p.114)。
- 10) ルソーは分業という語は使っていないが、意味しているところは同じである(cf. Starobinski, 1971, p.349)。『社会的分業論』の著者でもあるデュルケームは、ルソーの依存関係として、支配者と奴隷のような不平等な相互依存しか視野に収めておらず、相互依存が社会的分業ともなりうる可能性を考慮していない(Durkheim, p.141-142, p.100-101)。またデュルケームは「人間たちは不平等になったため、相互に依存する状態に陥った。その結果、社会は支配者と奴隷から成るようになった」(同上, p.141, p.100)と述べているが、不平等が依存関係をもたらしたのではなく、「無数の新しい欲望」に起因する依存関係が不平等を生み出したと理解する方がルソーの真意に沿っていると思われる。「無数の新しい欲望」が、自然状態では大きな意味をもたなかった諸々の生得的な自然的属性である「不平等」を有意義なものに変えてしまい、依存関係をもたらしたのだ。
- 11) ルソーの「自然状態」は、「おそらくは存在したことがなく、多分これからも存在しそうにもない一つの状態、しかもそれについての正しい観念をもつことが、われわれの現在の状態をよく判断するためには必要であるような状態」(『人間不平等起源論』, p.123, p.27)と、ルソー自身が述べているように、理論上の仮説である。それゆえ、自然人だけがもつとされる「真の欲望」も同様に、文化的・社会的影響をまったく被らない、理論上においてのみ存在しうる、純粹状態の生物学的欲望である。

- 12) すでに、スタロビンスキーが1964年に『人間不平等起源論』を解説して、「社会人 [homme civilisé] は (…) 他者の欲望を欲望する」(O.C.Ⅲ, p.LXII) と、慧眼にも指摘しているが、他者の欲望を欲望することを依存関係と関連させて論じる視点をもっていないので、それ以上の議論の発展がない。
- 13) 『ジャン＝ジャック・ルソー事典』(Trousson et Eigeldinger, 1996)の「クロード・アネ」の項目(p.36)の筆者 W. Acher は、ルソーが『新エロイズ』の登場人物にアネの名を利用したことに特に解釈すべき意味はないと主張するが、その根拠は示されていず、説得的ではない。
- 14) 『告白』は自伝と称してはいるが、意図的な再構成に近く、『新エロイズ』は小説ではあるが、理想化された自伝とも言える。いずれも、自己の生涯を再度、テキスト上で自分の望む通りに生き直そうという試みである点で、共通性をもつ。『新エロイズ』は「もうひとつの告白」であるという松本勤の指摘は正しい(松本, 1995)。サン＝ブルーはルソーであり、ジュリはヴァランス夫人であるとともに、ドゥドト夫人なのである。
- 15) 特に『告白』においては、ルソーの自らの三者関係の本質についての盲目性が際立っている。『新エロイズ』では、サン＝ブルーとジュリを観察するヴォルマルの「生きている眼」という形象が、三者関係の問題の所在について、ルソーがある程度、明確な理解をもたないままであるが、意識していることを窺わせる。

(ルソーの著作の引用ページの指示はフランス語版、邦訳の順。『新エロイズ』の「Ⅱ, 17」等は「第二部、書簡十七」を示す)。

参考文献

- Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi des hommes*, dans: *OEuvres complètes*, III, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1964, p.111-223, 本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起源論』, 岩波文庫, 1972.
- *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, 2 vol., coll.folio, Gallimard, 1993, 安土正夫訳『新エロイズ』一・二・三・四, 岩波文庫, 1960-1961.
- *Confessions*, dans: *OEuvres complètes*, I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959, 桑原武夫訳『告白』上・中・下, 岩波文庫, 1965-1966.
- *Emile ou de l'éducation*, coll. folio, Gallimard, 1995, 今野一雄訳『エミール』上・中・下, 岩波文庫, 1962-1963.
- Emile Durkheim, *Montesquieu et Rousseau, précurseurs de la sociologie*, Marcel Rivière et cie, 1966, 小関藤一郎・川喜多喬訳『モンテスキューとルソー』, 法政大学出版局, 1975.
- René Girard, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Grasset, 1961, 古田幸男訳『欲望の現象学』, 法政大学出版局, 1971.
- *Critique dans un souterrain*, Editions l'Age d'Homme, 1976, 織田年和訳『地下室の批評家』, 白水社, 1984.
- Jean Starobinski, *L'oeil vivant*, Gallimard, 1961, 大浜甫訳『活きた眼』, 理想社, 1971.
- *J.-J. Rousseau, la transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971.
- Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger, *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, Honoré Champion, 1996.
- 柄谷行人『増補 漱石論集成』, 平凡社, 2001.
- 作田啓一・井上俊編『命題コレクション社会学』, 筑摩書房, 1986.
- 作田啓一『個人主義の運命』, 岩波書店, 1981.
- 作田啓一『増補 ルソー』, 筑摩書房, 1992.
- 樋口謹一『ルソーの政治思想』, 世界思想社, 1978.
- 松本勤『ルソー 自然の恩寵に恵まれなかった人』, 新曜社, 1995.

Rousseau, as seen from Girard's Triangular Relationship

Toshikazu ODA

Abstract

According to Rousseau, one person's dependence on another whether material or mental in the civil society, as against his or her solitary independence in the state of nature, is the very source of corruption in human nature.

As humans take off the state of nature and create civilization, they come to admire and respect those who possess such skills and arts that are useful to live a civilized life. But with the progress of civilization, this sort of admiration and respect itself, and not those skills and arts themselves, becomes the aim and the object of each person's desires. And then, in order to earn such respect, it often becomes necessary to pretend to be what one is really not, and there emerges, as a common phenomenon, a gap between one's appearance and his or her true self.

The respect and honour shown by others is what people seek and desire most in the civilized world. And in this context of mutual evaluations and competitions each person tends to be a model for another person and, at the same time, a rival against each other.

Rousseau's concept of one person's dependence on another is exactly what René Girard calls "triangular relationship." Rousseau experienced this relationship in his youth with Mme de Warens and her steward-lover Claude Anet and idealized it in his *Confessions*. Also, while writing *Nouvelle Héloïse*, in which he depicted the triangular relationship of Saint-Preux, Julie and Wolmar, Rousseau in real life came to love Mme Sophie d'Houdetot and dreamed of forming a triangular relationship involving himself, Mme d'Houdetot and her lover Saint-Lambert, who was also Rousseau's friend.

However, Rousseau is unaware of the fact that one person's dependence on another, which is the unique characteristic of human relationships in the civil society, and the triangular relationships which he himself experienced (and that of the three major characters in *Nouvelle Héloïse*) are caused by the same mechanism in human nature, and it is this mechanism that Girard calls the "principle of mimetic desire."

Although Rousseau shows a remarkable insight in his analysis of one person's dependence on another in the civil society, he is curiously blind concerning the true nature of the triangular relationships that he depicts in his autobiographical works.

Keywords: triangular relationship, mimetic desire, dependence, Girard, Rousseau